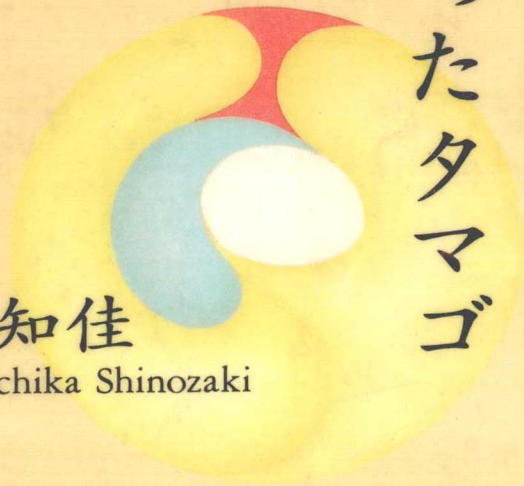


透き通ったタマゴ

篠崎未知佳

Michika Shinozaki



透き通ったタマゴ

一九九四年八月二五日 第一刷発行

著者——篠崎未知佳

発行者——棚橋芳夫

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座3-13-10 〒104-0031
電話 書籍販売部 〇三(三五四五)七二七五
書籍編集部 〇三(三五四五)七〇三〇

印刷所——暁印刷株式会社

製本所——株式会社積信堂

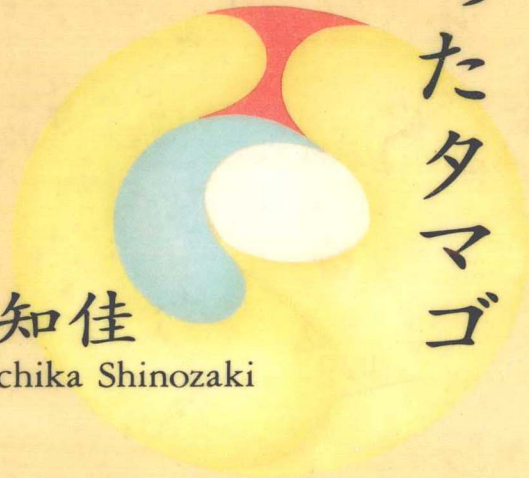
装丁——原 研哉

装画——平野敬子

©1994 Michika Shinozaki Printed in Japan
ISBN 4-8387-0528-X C0095

乱丁本・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。

透き通ったタマゴ



篠崎未知佳

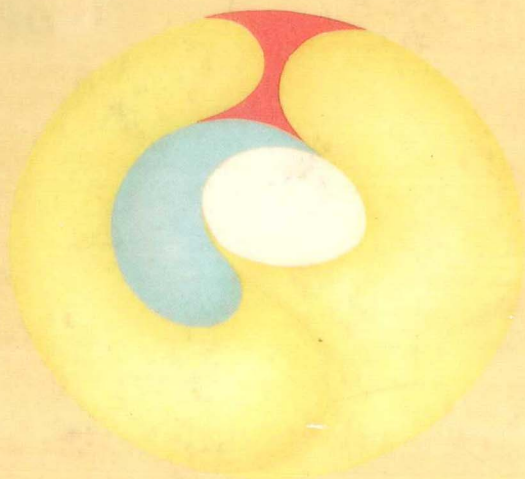
Michika Shinozaki

ISBN4-8387-0528-X

C0095 P1200E

定価＝1200円(本体価格＝1165円)

マゼンハウス



透き通ったタマゴ

篠崎未知佳

サザンハウス

目次

透き通ったタマゴ

7

親指

25

新幹線

37

ピンクのタオル

57

ミラ

77

アニメ

99

過食症

117

お兄ちゃん

153

あとがき

188

透
き
通
つ
た
タ
マ
ゴ

冬のある夜、

つけっ放しのテレビは砂の嵐、そして耳元では父のわれ鐘がねのような鼾いびきの音、わたしをしつかりと掻き抱いて眠っている。

寝返りを打とうとすると、眠りの浅い父はすぐに心配そうな目を開ける。

「どうした？　ちゃんとこっちへおいで、ほらほら……」

「パパ、テレビ……」

わたしは布団から抜け出す。

つま先から這い上がってくるような畳の冷たさに、思わず身震いする。急いでスイッチを切り、ふたたび父の布団にもぐり込む。

父の胸に顔をうずめピッタリとくっついていけると、急速に體からだが暖まっていく。

今度は鼾の代わりに、ゆったりとした鼓動が伝わってくる。わたしのは父と比べると、なんだかセカセカしていて頼りない。父に合わせようと、大きく息を吸ったり吐いたりしてみようとうとう重ならないまま、いつしか眠りについた。

父と母の出会い、ヴァイオリン教室だった。

父のもとへ母がヴァイオリンを習いに通っていたのだ。

ふたりの年齢差は二十四歳、当然母の両親からは猛反対にあい、駆け落ち同然で結ばれた。母がまだ大学生の時だった。

十年後、姉が生まれた。それから、六年経って、父の還暦の年にわたしが生まれた。年老いてからの子供ということもあったのだろうか、父はわたしが戸惑うほど溺愛した。

母はわたしが生まれる前からすでに仕事をしていた。

悲しみは突然訪れた。

わたしが六歳の年に、肝硬変がもとで父はあっけなく逝ってしまったのだ。

そして女三人の生活が始まった。

こんなことが想い出される。

東南アジアへ出張のため、母が一週間ほど家を空けることになった。姉とわたしは会社の人に付き添われ、母を見送った。

飛行機が見えなくなってしまう後も、ぼーっと羽田空港のデッキにたたずんでいた。

母が出掛けるその日の朝まで、家の中は奇妙な興奮に包まれていた。

チフスやコレラの予防接種を受けてその必要性を嬉々として語る母のかたわらで、なんだかとてもなく遠くへ行ってしまうようで、残される者たちの心は落ち着かない。

「本当は、ママ、行きたくないんだけど……。仕事だから——」

そう言う母の顔は輝いていた。

出発が近づくにつれ、母のテンションは日増しに高まる。

比例して、わたしたちの不安も膨らんでいった。

留守中は、臨時のお手伝いさんがやって来た。その六十歳前後の女性ときたら、日がな一日お茶菓子をつまみながら、テレビの前に座り込み、家の中が汚れていると文句ばかりこぼして、何もしない。

旅程も半ばを過ぎたころ、一枚の絵葉書が届いた。

『未知佳さま。ママは今、シンガポールに来ています——』

漢字にはすべて丁寧なルビがふつてある。

わたしはそれを持って、自分の部屋に入った。

ベッドの上には、いつも使っている羽根枕の横に、もうひとつソバガラ枕が置いてある。

それは日頃から母の使っているものだった。母がいなくなってから、わたしは毎晩それを抱きかかえて眠っていた。

枕に顔をうずめると、懐かしい匂いがある。その中で、何度となくハガキを読み返す。そうするといくらかでも近くに感じられるからだ。

そして、頼みの綱の枕の香りも、消えかかろうとするころ、

「ただいまぁー」

こんがりとお焼けて、手に一杯の荷物をさげた、ニコニコ顔の母が玄関に立っていた。

姉はさっそく絡まりつき、とうとうとお手伝いさんの悪口を並べ立てている。わたしは姉の迫力に圧倒され、ただただ母の姿を目で追うだけ。

お風呂から上がり、パジャマに着替えるころには、ようやく落ち着きを取り戻した。

母は腰を据えてお土産を広げ始めた。

次々と異国情緒漂うお人形や、ビーズでできた小物入れなどが飛び出す。でも、それらは日本のおもちゃと比べるとあまりにも素朴で、内心少々がっかりしていた。

「これでおしまい」

母が二つの小箱を取り出した。

プレゼントの順番は、いつも最後に一番イイモノが出てくると決まっていた。

「奮発したんだから……」

開けて見ると中には、小さなルビーが渦巻き状に並んだ指輪が入っていた。

ルビーは姉とわたしの誕生石である。

「あーっ、わたしの、石がひとつ欠けてるぅ！」

姉が叫んだ。

ギョッとした母が、箱を覗き込もうとするのも無視して、指輪を置きつ放しにしたまま、プ
ウーッと膨れて自分の部屋に戻ってしまった。

毎度おなじみの姉の態度ではあったが、このときばかりはさすがの母もため息を漏らした。
気まずい空気が流れ、すっかり落胆したその表情に、わたしまでも切なくなる。

気を取り直し、期待を込めてわたしを見る。

「どう、未知佳？」

指輪を複雑な心境で見つめた。

確かにそれは綺麗だったけど、ここで素直に喜べるほど、一週間の不在は、楽なものではな
かったからだ。

でもわたしは直感的に心得ている母の最も喜ぶ方法を選んだ。

指輪を手に取り右手の中指にはめると、抜けないように手を握りしめた。

「これしたまま寝ちゃおうかなあ？」

「ダメ、ダメ、そんなことしたら、また石が取れちゃうかも知れないでしょ。いいわ、ママが
ちゃんと預かっておいてあげる」

「わぁー、嬉しいなあー。この指輪、絶対に無くしちゃイヤよ」

『本当は、指輪のことよりママが居なかった淋しさを訴えたい』

でも、そんな自分の気持ちなど、ちょっと我慢すればよいのだ。

もう、母は帰って来たのだから。

それよりも、いつも忙しい母との貴重なふたりの時間をなごやかに過ごしたかった。

父が亡くなってからというものの一事が万事、このような状況が日々繰り返された。

わたしが大学へ進むと、間もなく姉が結婚した。

何かにつけて母と衝突していた姉がいなくなると、まるでそれを待ち構えていたかのように、それまで^お澱^おとなつて沈^お澱^おしていた気持ちが一気に噴き出した。

それは『凄まじい食欲』という形で姿を現した。

抑えれば抑えるほど、食欲の波は怒濤となり襲ってくる。

『いったい、わたしは何をしているんだらう……』

だが、そんな自分をどうすることもできない。

独りきりのときを見計らつては食べまくっていた。

夜、母が帰ってくる。

ドアを開けると、両手にスーパーの袋をさげて母が立っている。

「おかえりなさい」

言うだけが精一杯で、目を見ることはできない。

「ただいま。今日はいい松阪のお肉があったから買って来たわ」

部屋着に着替えながら言う。

「たまにはすぎ焼きでも一緒に食べようかと思って」

わたしは何もこたえられずに黙っている。

エプロンをつけて冷蔵庫を開ける。

中のものはなにひとつ残っていない。

途端に母の顔から笑みが失せた。

黙っているわたし、何も言わない母。

「未知佳？ ママ、ちょっとシャワー浴びてくるから、そのあいだに白滝ゆでといて……」

「うん」

ほどなくしてバスルームから気持ちを新たに出来ると、ふたたび料理に取りかかる。

『何と言って夕食を断ろうか？ せっかくママの機嫌なおったのに』

ソファに座ってテレビを眺めながらも、頭の中はそのことではいっばいになっている。

しばらくして食事が出来上がった。

「お箸とお茶碗を並べてちょうだい」

声はすっかり明るさを取り戻している。

「わたし、お腹一杯だから、夕食いらないや……」

胸が潰れそうになる。

また、もとの空気に逆戻り。

母は押し黙ったまま、ひとりで食事を始める。

わたしはソファの上で、石のように硬くなっている。

しばらくして、母のいたわるような哀しい声が聞こえた。

「野菜なら太んないわよ。一緒に食べない？」

「うん……」

しぶしぶ食卓につく。

目の前では、すっかり煮詰まってしまった肉や野菜や豆腐が、鍋の中でグツグツと音を立てている。その中から野菜だけを注意深くつまんで、機械的に口へ運ぶ。

『いったい、わたしは何をしているの……？』

こぼれ落ちる涙と鼻水でぐずぐずになりながら、まだ野菜だけを選んでいる。

翌日には、前日食べ過ぎてしまった分を取り戻すために、絶食。